

# 本学におけるキャリア教育の方向性の検討(1)

～学生の実態把握を中心に

渡部 昌平\*・土屋 梨恵\*\*

## 1. はじめに

今日、産業・経済の構造的変化、雇用形態の多様化・流動化などを背景として、将来への不透明さが増幅するとともに、就職・進学を問わず、進路を巡る環境は大きく変化しており、学卒未就職者、即ちフリーターやいわゆる「ニート」が大きな社会問題となってきた。また入社数年で若年者が離職する早期退職問題、いわゆる「753現象」も指摘されるようになってきている。

このような状況の中、学生たちが「生きる力」を身に付け、明確な目的意識を持って日々の学業生活に取り組む姿勢、激しい社会の変化に対応し、主体的に自己の進路を選択・決定できる能力やしっかりとした勤労観、職業観を身に付け、それぞれが直面するであろう様々な課題に柔軟にかつたくましく対応し、社会人・職業人として自立していくことができるようにする「キャリア教育」の推進が強く求められている。

各大学に対しても、大学設置基準の改定により「キャリア教育」が求められるようになり、今後、「自立した学生」の育成のためのキャリア教育が重要になっている。

本学においては、これまで他大学に比べ就職率が非常に良く、さらに今後、キャリア教育センターを立ち上げ、組織としてキャリア教育を強化する姿勢を取っているが、一方で今後の就職率や定着率には懸念が示されている。

今後のキャリア教育の強化のためには、学生の実態を把握し、今後の方向性を検討する必要がある。

このため、本研究ではまず本学学生の実態、また本学学生への企業等の評価を把握し、今後の方向性について提案することを目的とする。

## 2. 学生の実態(1)：大学生の目標設定に関するアンケート結果

(手続き) 本学の秋田・本荘両キャンパスの学生を対象に平成23年5月にアンケートを実施した。本荘キャンパスの1年生については必修科目「創造科学の世界」の時間、秋田キャンパスの1年生については同じく必修科目「生物資源科学への招待」の時間、3年生については両キャンパスともに就職ガイダンス(課外講座であるが、実質的に必修)の時間を利用した。実施日および回答者数は表1のとおりである。

表1 目標設定に関するアンケート  
(実施日及び回答者数)

学 年	実施日	回答者数(名)
秋田キャンパス		
1年生	H23. 5. 2	143
3年生	H23. 5. 13	136
本荘キャンパス		
1年生	H23. 5. 13	240
3年生	H23. 5. 10	205

(結果) 1年生と3年生の結果を図1に示す。両学年においてQ1、Q2、Q4、Q5では回答となる選択肢を「具体的に持っている」または「十分に行動している」ほうから順に4点、3点、2点、1点と得点に換算し、相加平均と標準偏差を求めた。

結果、Q1「大学生生活の目標を持っているか」もQ4「大学卒業後の目標を持っているか」も1年生、3年生で変わらない(むしろ1年生が高い)結果となった(有意差なし)。

またQ3「(大学生生活の目標達成に向けて)

\*総合科学教育研究センター

\*\*就職情報センター嘱託職員(就学力G P担当)

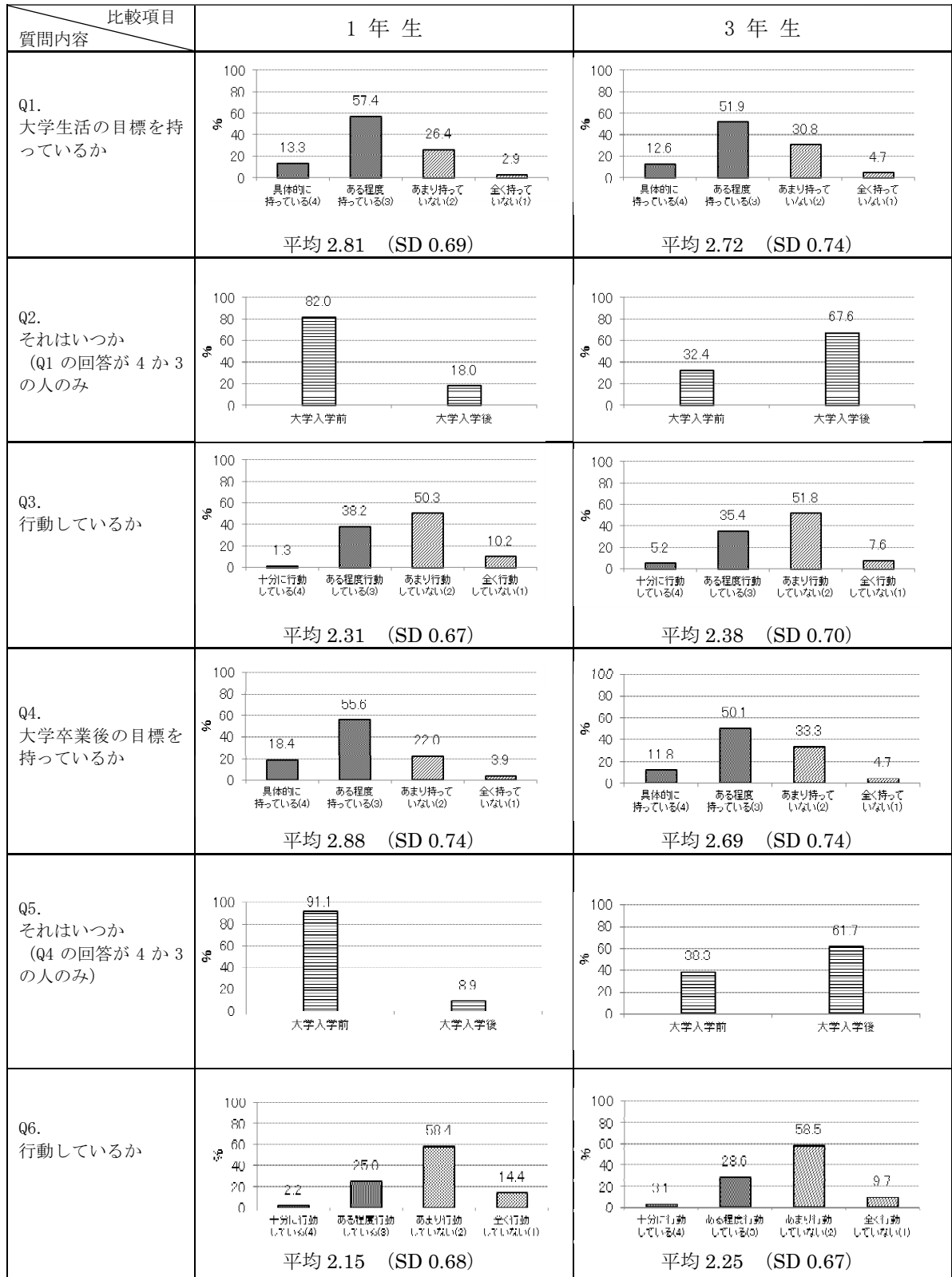


図1 大学生における目標設定に関するアンケート結果

行動しているか」もQ5「(大学卒業後の目標に向けて)行動しているか」とも1年生、3年生で変わらない(3年生のほうが多少高いが有意差なし)結果となった。

なおQ2、Q4の「いつ目標を持ったか」という質問については、1年生は「大学入学前」と答えたのに対し、3年生は「大学入学後」と答えており、入学後に目標が変わっている可能性(目標の質的变化の可能性)が示唆される結果となった。

(考察) 本学に入学する学生は、1年次で「具体的な目標」を持っておらず、このため目標達成に向けた行動が具体化していない。また3年次になっても目標が全く具体化していないため、行動が具体化していないことが読み取れた。具体的な目標を持たせることが、具体的な行動につながる可能性が示唆される。

### 3. 学生の実態(2): 「働くこと」に関するアンケート結果

(ガイダンスの実施及び内容) 上記結果を踏まえ、平成23年5月27日に秋田キャンパス3年生向けの就職ガイダンスにおいて「働くこと」をテーマとした講義を実施した。

「いい仕事(ぶり)とは」というテーマで、正社員でもパートでも雑用でも、また本人の能力如何にかかわらず「一生懸命仕事をする」「丁寧に仕事をする」ことも「いい仕事である」、今の行動・生活の延長が「いい仕事」につながる、という内容の説明を行った。

(手続き) 前記ガイダンスに出席した秋田キャンパス3年生108名に対してアンケートを実施した。アンケート実施日はガイダンス当日の平成23年5月27日である。

(結果) 結果を図2.1~2.4に示す。

90分1コマのガイダンスであったが、働くことを前向きにとらえるようになった学生が多かった(図2.1→図2.2)。

また、「いい仕事を目指してみたい」と思うようになった学生が多いこと、いい仕事をするために「普段の行動(学校生活)を変えようと思った」学生

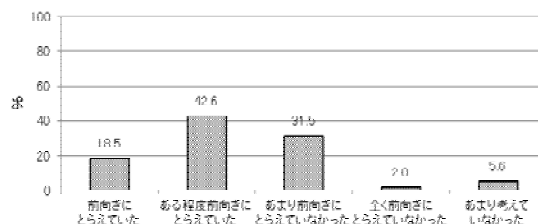


図2.1 「働くこと」についてどう考えていたか

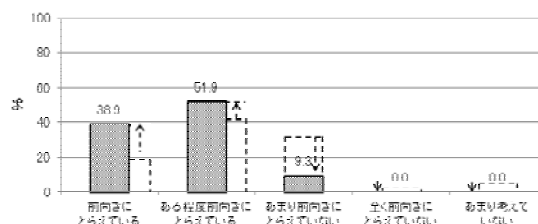


図2.2 現在「働くこと」についてどう考えているか

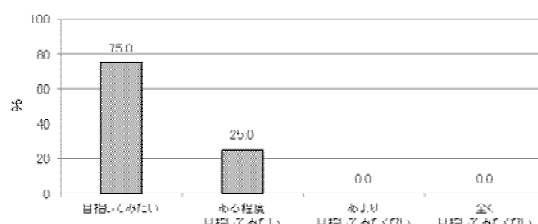


図2.3 「いい仕事を目指してみたい」と思うようになったか

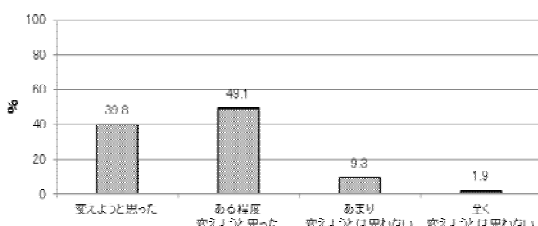


図2.4 普段の行動(学校生活)を変えようと思ったか

がかなりの数に上った(図2.3、図2.4)。

(考察) 学生はこれまで「いい仕事とは」と考える機会もなく、そのため普段の行動を振り返ったり反省したりした経験がない可能性が示唆される。

また学生に対し、機会を作って仕事について考えさせる(振り返らせる)必要性が示唆される。

#### 4. 学生の実態(3)「自分を知る」アンケート結果

(ガイダンスの実施及び内容) 平成23年6月3日に秋田キャンパス3年生向けの就職ガイダンスにおいて「自分を知る」をテーマとした講義を実施した。

職業カードソートの技法を活用したワークシートを用いて、学生個人個人の根源的な職業的価値観を発掘し、それぞれにその印象を感じてもらった。

(手続き) 前記ガイダンスに出席した3年生112名に対してアンケートを実施した。アンケート実施日はガイダンス当日の平成23年6月3日である。

(結果) 結果を図3.1～3.4に示す。

90分1コマのガイダンスであったが、当初から自分を「十分に知っていた」という学生は少なく(図3.1)、ガイダンス実施後にはかなりの学生が「自分を知ることができた」と回答していた(図3.2)。

また、学生は「自分を知ることで目標を立てられる」「自分をもっと知りたい」と考えていた(図3.3、図3.4)

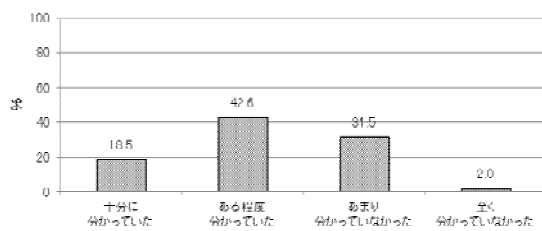


図3.1 「自分を知る」ことができていたか

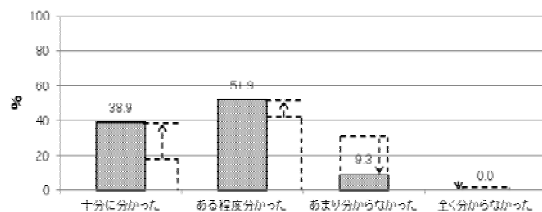


図3.2 現在「自分を知る」ことができたか

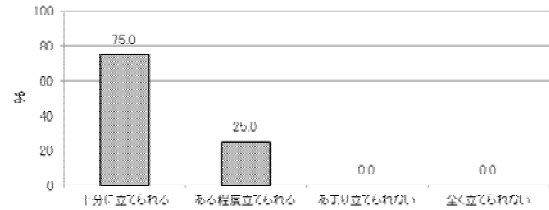


図3.3 「自分を知る」ことで目標を立てられるようになると思うか

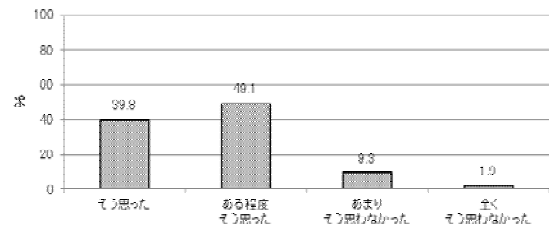


図3.4 自分をもっと知りたいと思ったか

(考察) 多くの学生は自分のことを十分に知らず、ガイダンスで実施されたワーク等で自分を知ることで「目標が立てられる」「自分をもっと知りたい」と考えられるようになることが分かる。

目標設定に当たっては、自己理解をより深める必要がある可能性が示唆される。

#### 5. 学生の実態(4)インターンシップ企業アンケート

(手続き) インターンシップ受入企業70社に対して平成23年11月にアンケートを実施した(回収62社:回収率89%)。アンケート回収の締切は同年11月末日とした。

(結果) インターンシップ終了時点での評価結果を図4.1～4.5に示す。

企業からの評価としては「礼儀作法・マナー」は評価されたものの(図4.1)、「社会や企業に対する理解」の評価は比較的良かった(図4.2)。また経済産業省が定めた「社会人基礎力」の観点では、「チームワーク力」は評価されたものの(図4.5)、それに比して「前に踏み出す力」「考え抜く力」は必ずしも評価されていなかった(図4.3、図4.4)。

個別の企業意見を見ても「積極性が不足」

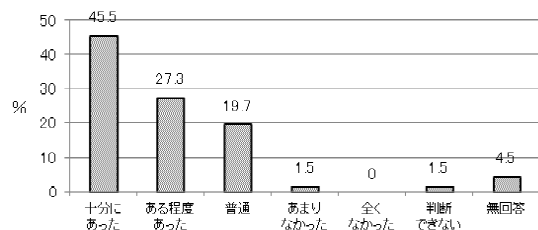


図 4.1 礼儀作法・マナー

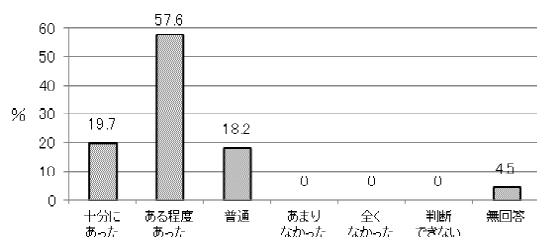


図 4.2 社会や企業に対する理解

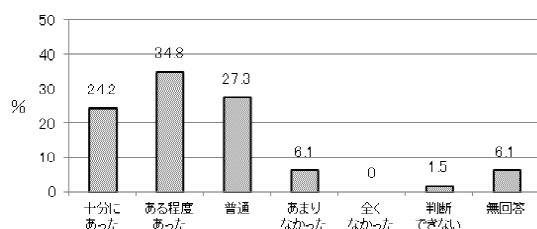


図 4.3 「前に踏み出す力」  
(主体性、働きかけ力、実行力)

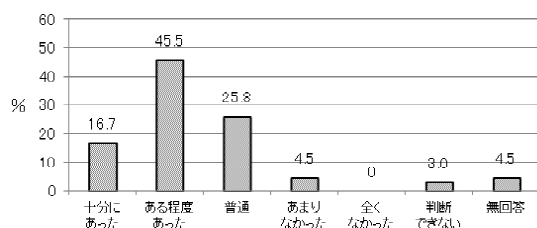


図 4.4 「考え抜く力」  
(課題発見力、計画力、想像力)

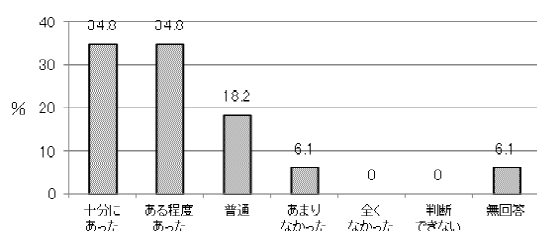


図 4.5 「チームワーク力」(発信力、傾聴力、柔軟性、状況把握力、規律性、ストレスコントロール力)

「指示待ち」等の意見があった。

(考察) 基本的な礼儀作法・マナーは評価されたものの、「社会や企業に対する理解」「前に踏み出す力」「考え抜く力」は高い評価とは言えない。学生に対しては「仕事理解」の支援に加えて、「積極的な行動」を促す支援が必要かもしれない。

これらは学生が「本来の目的を理解してインターンシップに参加している訳ではない」ことを示唆しているのかもしれない。

## 6. おわりに (総合考察)

2009年に実施された学生アンケートによると、本学学生は予習・復習にほとんど時間をかけていないことが分かっている。本学において、学生に「目標設定」をさせ「行動を具体化」させることは喫緊の課題である。

本研究でも分かるとおり、本学の学生は1年次においても3年次においても目標が具体化しておらず、そのため、行動も具体化していない。またインターンシップ受入企業の評価として「社会や企業に対する理解」が少なく、「前に踏み出す力」「考え抜く力」の評価が低めであった。

ところで就職ガイダンス後の2つのアンケート結果(項目3、4)から想像できるように、「自己理解が目標設定を促す可能性」が、「仕事理解が行動変容を促す可能性」がある。

即ち、今後の対策として、学生に対し「目標設定を具体化するために、自己理解を進めること」「行動変容を具体化するために、仕事理解を進めること」が有効であることが示唆されよう。また積極性の涵養も重要事項となってくるであろう。

これらの結果を踏まえると、本学では今後、キャリア教育として大学低学年の時期から「自己理解」「仕事理解」を進めることが重要である。低学年からの積極的な行動が、学生生活の満足、ひいては就職時期の自己PRや志望動機にもつながるからである。またこうした自己理解・仕事理解の支援を進めることで学生の積極性が涵養されたか否か、確認することも必要となってくるであろう。自己理解・仕事理解の

支援でも積極性が涵養されなかったとしたら、他の方策を考える必要がある。

なお本研究は主として秋田キャンパスの3年生100人強に対するガイダンス及びその結果(アンケート)に基づく探索的研究の結果であり、結果の分析には限界がある。しかしながら全般的な傾向として「自己理解」「仕事理解」が不足しており、その充実が必要であることは認められるように思う。

今後は学生の「自己理解」「仕事理解」に資するキャリア教育を実行するのと並行して、他学年・本荘キャンパスの実態を把握したり、近隣の高校・大学等との比較調査等を行ったりすることによって、より子細かつ具体的にキャリア教育の内容を検討することが望まれる。

いずれにせよ学生の自己理解→目標設定→行動変容(目標達成)の過程が重要であり、その支援を行うことが学生の成長を促すものと思われる。また今後はキャリア教育の効果測定も重要となってくるものと思われる。

## 文 献

安達智子(2004) 大学生のキャリア選択その心理的背景と支援. 日本労働研究雑誌, No. 533, 27-37.

溝上慎一(2004) 現代大学生論 ユニバーシティブルーの風に揺れる. NHKブックス

大庭健, 廣石忠司, 下村英雄, 中野育男, 内山哲朗(2008) 職業と仕事…働いて何? 専修大学出版局.

トマス・ゴードン(近藤千恵訳)(1990) 自立心を育てるしつけ. 小学館.

社団法人国立大学協会 教育学生委員会(2005) 大学におけるキャリア教育のあり方—キャリア教育科目を中心に—. (社)国立大学協会 教育学生委員会報告書.

渡部昌平(2006) 誰でもできる簡単キャリア教育はじめて入門. (社)雇用問題研究会.